

〔 1 1 〕 東臼杵地区小体連

(学校数 1 3 校 児童数 1, 2 5 2 人)

I 年間事業

期 日	内 容	会 場
6 月 1 0 日	第 1 回東臼杵地区小体連理事会・評議員会	オンライン実施
7 月	諸塚村小学校水泳記録会	各学校で実施
7 月 4 日	椎葉村小学校水泳記録会	各学校で実施
1 0 月 2 4 日	椎葉村小学校陸上大会	椎葉村総合運動公園
1 1 月 1 2 日	門川町小学校陸上記録会	門川海浜総合公園
1 1 月 1 9 日	美郷町陸上記録会	美郷町各学校
2 月下旬～3 月上旬	第 2 回東臼杵地区小体連理事会・評議員会	オンラインで実施

※ その他、各町村で体育主任会を実施している。

II 事業部のあゆみ

1 水泳記録会

【出 場 者】 諸塚村、椎葉村・・・5・6 年児童（6 3 名）

【実施種目】 2 5 m（自由形、平泳ぎ） 5 0 m（自由形、平泳ぎ） 2 5 m×4 リレー

※ 地区によって実施しない種目あり

2 陸上大会・記録会

【出 場 者】 門川町 6 年児童、椎葉村 5・6 年児童、美郷町 5・6 年児童 （2 7 7 名）

【実施種目】 1 0 0 m 走 8 0 0 m 走 1 0 0 0 m 走 5 0 m ハードル走  
4 0 0 m リレー 走り幅跳び 走り高跳び ソフトボール投げ

※ 地区によって実施しない種目あり

### Ⅲ 研究部のあゆみ

#### 1 研究主題・副題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、  
豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の基礎を育む体育科学習  
～児童一人一人の思考力、判断力、表現力等を養う授業の創造と展開～

#### 2 主題設定の理由

東臼杵地区は、門川町、諸塚村、椎葉村、美郷町の4つの小学校体育連盟が集まって構成されている。各地区小体連の実態も様々である。山間地域では、多くの学校が小規模校であり、自然に囲まれ、児童は温かい人間関係の中で育ってきている。一方で、近くに公園や運動施設がなかったり、バスや車での登下校により、日常的に運動不足に陥ったりしている児童も多い。児童数の減少とともに、学習形態の工夫も考えていく必要がある。また、スポーツ少年団等の放課後の活動も各校で差が見られ、特にスポーツ少年団のない小学校では、学校以外で運動をする機会がほとんどないのが実情である。そのため、運動の二極化が児童間で広がっている地区もあり、運動の機会が極端に少ないまま大人になってしまう可能性もある。人間形成を図る上で重要な時期である小学校段階において、運動に親しむ資質や能力の基礎を形成することは、生涯にわたってスポーツに親しみ、健康な生活を送る上で大変重要である。

そこで、研究主題を「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の基礎を育む体育科学習」とし、4つの町村それぞれの地区・小学校で児童や学校、地域の実態に応じて副題を設定し、研究に取り組むことにした。

本地区においては、これまでの各地区・各学校での取組を継続させながら、児童がより主体的に運動に関わり、対話的な学びを実現するための具体的な手立てを講じることができれば、健やかな心と体を育み、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることにつながるのではないかと考えた。

#### 3 研究目標

主体的に運動に関わり、児童に運動の楽しさを実感させる。  
生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方を究明する。

#### 4 研究の仮説

系統性を踏まえた指導内容の一層の充実及び指導と評価の一体化を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりや、共生の視点に立った指導内容の充実を実現すれば、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現し、継続するための資質・能力を育むことができるであろう。

#### 5 研究の内容

『児童一人一人の思考力、判断力、表現力等を養う授業の創造と展開』  
① 指導と評価の一体化  
② 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善  
③ 共生の視点に立った指導内容の充実

## 6 研究の実際

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	ネット型「ソフトバレーボール」	第5学年	門川町立五十鈴小学校 松田 義彦

### (1) 対話的な学習をするための手立て

児童が対話的な学習をするためには、児童自身が学習の流れを把握して効果的に運動できるようにし、主体的に学習に取り組むことが大切である。そこで、児童の実態に合わせてルール of 簡素化・変更することを児童に提案し、児童達がルール作りを主体的に話し合っ、活発に活動できる内容を考えられるようにした。

### (2) 深い学びを実現させるための手立て

児童が深い学びを実現させるためには、一人一人の運動量の確保が必要である。そこで4人1チームの構成にし、ワンバウンドパスでのラリーゲームが続くようにした。また、練習や試合後には振り返りの時間を設け、互いの良さや課題を出し合える雰囲気作りを行った。

### (3) 研究の成果と課題

- 児童自身がルール作りに携わることで、自分にあった課題作りもすることができた。
- 運動が苦手な児童もルールを簡易にしたことで、楽しむ姿が見られた。
- 改善点や作戦を話し合うことができていたが、ゲームに夢中になり忘れてしまう児童もいた。ゲーム中にも意識させる工夫や声かけが必要だった。
- 運動が苦手な児童に合わせたルール作りを行ったが、得意な児童への運動量の確保が十分でなかった。

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	タグラグビー	第3学年	諸塚村立諸塚小学校 甲斐 聡

#### (1) 「共生の視点」に立った導入

パリオリンピック「ボルダリング女子」決勝戦の話から、ルールによっては参加できない選手が出てきたり、周囲が悲しい気持ちになったりすることに気づかせた。そこから、選手はみな平等であるという共生の視点からルールを調整する必要性について考えさせた。【参考資料】読売新聞オンライン 8月10日掲載「スポーツクライミング森秋彩 第1課題でまさかの0点…身長低く最初のホールドつかめず」より

#### (2) 「主体的・対話的な学び」のために

- ・ルール作り  
試合結果から気づいたことをもとに、ルールを考えさせた。その結果、「もっと点数を取りたい」という願いを全体で共有し、どのようなルールで競技を進めるかを話し合った。
- ・試合に勝つための作戦カード  
タブレットのデジタルカードと実物のカードを準備し、使いやすい方を選ばせた。道具を使うことで、駒を動かしながら活発に話し合うことができた。実践した作戦を全体で共有し、周りの作戦を取り入れて戦うか、自分たちのオリジナルの作戦で戦うか選ばせた。

#### (3) 指導と評価の一体化

前時で困っていた場面を、児童に実演させたり ICT で写真を提示したりすることでルールの調整が必要なのか練習が必要なのか考えさせた。写真は、味方が前にいて、パスが出せず困っている場面。ここから、作戦の必要性を感じるチームが増え、(2) のような作戦作りが活発になった。

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	ネット型「ソフトバレーボール」	第1・2・4・6学年	椎葉村立不土野小学校 河野 要世

### 1 (1) 主体的な学びの充実に向けた工夫

児童が主体的に学習に取り組むためには、児童自身が学習内容に対して課題意識をもち、運動の楽しさを実感した上で、目標に向かって努力できる場を整える必要がある。そこで、本研究では、自分の動きをタブレットで撮影し、動きの達成度から5つのレベルに分け、自分の動きを撮影し、達成できたら次のレベルへと進むようにした。

レベル1	ボールを両手で転がして、狙った位置に転がすことができる。
レベル2	ボールを両手で投げて、バウンドさせながら狙った位置に落とすことができる。
レベル3	ボールを両腕で打って、バウンドさせながら狙った位置に落とすことができる。
レベル4	ボールを両腕で打って、狙った位置に落とすことができる。
レベル5	ボールを両腕で打って、相手とラリーを続けることができる。

(2) 対話的な学びに向けた工夫

児童同士の対話を大切に授業を構成するために、本研究では同じレベルの児童と話し合う場面と、レベルの高い児童がレベルの低い児童に教える場面の2つを設定した。

2 研究の成果(○)と課題(●)

(1) 仮説(1)について

- 映像で自分の動きを確認することで、具体的な目標に向かって意欲的に学習に取り組むことができた。
- 児童数が少ないため、高いレベルに達した児童が時間を持て余し気味になる場面があった。

(2) 仮説(2)について

- 達成度の低い児童が、自分の動きの課題について積極的に質問することができた。
- 達成度が同程度の児童と話し合う場面は十分に確保できたが、人数が少なく、課題解決に繋がらなかった。

領域	単元名	学年	授業者
ボール運動	ネット型 ハンドテニス「テニピン」	第3・4学年	美郷北義務教育学校 小玉 純也

(1) 主体的に運動に関わらせるための工夫について

- ① 誰でも意欲的に参加できるようにスモールステップで練習メニューを組んだ。
- ② ルールを工夫することで全員がゲームにかかわることができるようにした。

(2) 対話的な活動を充実させるための工夫について

- ① 作戦ボードを活用し、視覚的に作戦を考えたり、意見を共有したりすることができるようにした。
- ② 1ゲーム中に2回、作戦を話し合う時間を確保することで対話が活性化を図った。

(3) 深い学びにつなげるための工夫について

- ① 単元計画や本時の学習を伝えることで学習の見通しをもつことができたようにした。
- ② 1単位時間の流れの固定化することで、自分たちで行動することができるようにした。

(4) 成果と課題

- ルールの工夫やスモールステップの練習のおかげで、全員が楽しみながら技能を向上させたり、進んで運動にかかわったりすることができた。作戦ボード等を活用することで対戦相手に応じた作戦を選んだり、自分たちにあった作戦を立てたりすることができた。作戦タイム⇒試合前半⇒作戦タイム⇒試合後半という流れを固定化したことで、自主的に行動することができた。
- タブレット等を活用し、実際に自分たちの動きを見て対話ができると良かったと感じた。作戦を立てることはできていたが、実際に行動にうつす難しさもあったので、もう少し基本練習に時間を割くべきだった。対話の記録を残して振り返ることができると良かったと感じた。

IV まとめ

今年度は、東臼杵地区授業研究会を各学校で行う形となった。それぞれの実践から、児童が主体的に学びを進めるためには、実態に合わせたルール作りに関わらせたり、児童自身が学習の見通しをもつことが大切であることが明らかになった。また、対話的な学びを進めるために、それぞれの学校で作戦タイムを工夫していた。実践をとおして、児童が主体的で深い学びを進めるためにも、ふりかえりにおいても ICT 活用は効果的であることも明らかになった。課題としては、運動を得意とする児童が満足感を得る工夫であると考えられる。

東臼杵地区小学校体育連盟としては、体育主任を中心として、次年度以降も主体的に運動に関わるための手立てや対話的な授業展開の工夫を柱とした研究を進めていきたい。更に、体育の授業で学んで得た知識や技能などを、自分の将来にどう生かしていくのかという自己実現に向けた教育も考えていきたい。